
墮ちゆく硝子

白坂 ゆのる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちゆく硝子

【Nコード】

N2456C

【作者名】

白坂 ゆのる

【あらすじ】

絶世の美女と謳われ、己の美しさを売る棗。しかしそれゆえに彼女の心は決して満たされることはなかった。ただただ硝子は、棗は堕ちていく。棗は堕ちゆく己をとめることもできない。ある青年と出逢うまでは……。

序幕

「月が仄かに輝くあいだはせめてもの夢を棗にあげよう」
棗が最初にあいてにした男は闇夜にそういった。

その刹那棗はまた硝子は堕ちた、としたたかに思ったことだろう。
ただ、硝子は割れる。

なんの意志ももたず、己の役目を終えたとしんじて。

ゆめのかなしみ

棗は朝から不機嫌だった。

その証拠に淡い茶色の髪をかきむしっている。

理由としては男に貢がせたチヨコレートが、棗のすきなゴディバではなかったからだ。

あれだけ言ったのに、と棗は男をさんざん罵倒した。

「つかえないおとこね」

柔らかいピンク色のくちびるから出された声は、小鳥のさえずりのようにきれいだった。

その陶器のように白い肌に長い指を這わせながら後ろのベッドに倒れる。

するとそれまで棗をみていたまたちがう男が起きあがった。

「姫はごきげんななめなのですか？」

口角をだらしなくあげて男は棗に言った。

棗はふふ、と笑い、男のくちびるを足の指で押さえつける。

「だまってください」

きつと男をにらみつけて、棗はゆっくりと立ちあがった。

「かえります」

きっぱりと言い放つと男はやれやれ、とでも言いたげに手を動かした。

棗は気にせず、ハンドバッグを掴んで扉をあけた。

もうそろそろあの男にも飽きたかな、と棗は思った。

外にでると、ぽちゃぴちゃ雨がふっていた。

夏のあめは湿気っていて、熱気がこもっているようだ。

天気予報もみない棗には傘もなかったので、ためらわず雨に濡れた。しかしそれは決してぬれねずみとかいうものではなく、蝶が雨の中を舞っているようだった。

アスファルトが雨に濡れて、独特のにおいをかもしだす。ふとみたみずたまりに映る己の姿をみて、棗のきぶんはすこし高揚する。

道路には時々車が通るけれど、歩くひとは棗以外にはみあたらない。そして棗の姿はハイヒールの音とともに、町へ吸いこまれていった。

甘いといき

灰色に彩られた薄暗い部屋で、棗は真紅の口紅をぬる。そしてその上から艶かしい舌で、その色をなじませる姿はなんとも言えず美しかった。

棗の豊かな胸のあたりを、後ろから男が抱きすくめる。

それに気付いた棗は自嘲気味に晒ってから、甘い吐息を漏らした。

「おまえはいいな、棗。最高だよ」

「うふ、これも社長さんのおかげですわ」

そういつて棗は高価そうな首飾りを掴む。

「欲しいものがあつたらお言い」

「いま、ほしいものが」

「なんだい」

その答えに棗は満足げに笑う。

「社長さんが、欲しい」

男はきたない下品な笑みを浮かべて、棗の中に手を滑りこませた。

棗は床に寝転がり、自分のすべてを男にさらけ出した。

また、硝子は堕ちる。

けれども棗にはとめられない。

事を済ませて、棗は服を着た。

それをみる男の視線が、下品に棗の身体にまとわりつく。

「きょうはこれだけでいいか」

そういつて男は分厚い封筒を差し出した。

棗は何もいわずにそれを受け取る。

自分の舌を、男のくちびるにゆっくりと這わせる。

そのあとの余韻なんて残さずに、棗はさっさと部屋を出る。

男はすでに放心状態でなにも言わなかった。

「本日、30万円」

秦は早足であるきながらつぶやく。

秦自身、この行為の愚かさはよくしっていた。

でも、とめる術すらもない。

とめようとしても、彼女はまた墮ちていく。

男たちの醜い欲望によって。彼女の過去によって。

白黒のなかで

ああ、世界はモノクロームなのだ、と棗が気付いたのはいつからだろう。

棗がそれに気付いたとき、また新たにその妖艶さは見事なまでに増した。

そう、堕ちれば堕ちるほど、硝子はとぎすまされて輝きを増していくのだ。

しかしそれは、なによりも悲しい、悲しい美しさだった。

「きみをみていると、壊したくなるな」

棗と蜜夜をすごした男たちは、皆口々にそういった。

そして棗はそれに「ありがとう」と答えるのだ。

その表情に、魅惑的な微笑を浮かべて。

そうして男たちはその表情に、棗にまたのめりこむ。

どんな金品を捧げても、決してその心は自分には向かないとわかっていても、その微笑をもう一度、見たいと思ってしまうのだ。

そうして、男たちは棗のとりことなっていく。

ああ、しかし私ももう、すでに棗にとりこになっているのだろうか。

彼女の美しさを話し出すと、まるで歌い続ける小鳥のように、永遠にさえずってしまいそうなほどに。

今、棗は都心のデパートの中にいた。

外の蒸し暑い空気とは打って変わって、そこには快適で爽やかな冷風が空間を流れている。

そして、その空間の中では、様々な人たちがおのあの呼吸をしていた。

かき氷をおいしそうにほおばる者

商品を熱心に販売する男性店員

泣きじゃくるわが子をあやす母親

それぞれがそれぞれの、同じ空間にいらながらも異なつた人生を生きている。

しかし棗には、それがすべてモノクロにしか見えなかった。

否、それを色で見えることを棗は全身で、五感のすべてで拒否していた。

それがなぜかは、棗の心に深く深く、刻まれている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2456c/>

堕ちゆく硝子

2011年1月26日11時40分発行